

「玉篇の研究」を讀む

其の

近時文運の日に月に進むにつれて吾が國文・國語及び漢文の方面でも新しい研究が起ると俱に瀕い題目にも新しい検討が加へられ、新しい材料が現れると俱に瀕い傳本にも新しい考察が施されて、其の業績は實に素時らしく、徳川時代三百年間と云へば漢文の、次いで漢文の我は顔に學界を闊歩した時代だったが、其の三百年間の努力も今は殆ど基礎工事として地下に埋没せしめられんとして居る如く観える程である。然るに此の間に於てげざやかな研究の起らぬ換言すれば後れ勝に見える一角の有るのには小學即ち字書方面である。成程國語の大辭書も幾種も出で、漢字では高田竹山翁の古綴篇の如き空前の大作を見又古典保存會や貴重圖書影本刊行會から其々の從來學者が容易に手にし難かつた文獻を公にせられるのを見るといかにも賑はしいことだが、さて之を利用して研究題目にする學徒はと見ると實に曉天の星よりも稀なる事實は私の此の言を有力に證するでは無いか。昭和八年度に於ける東大・京大・東北大・九大の

四帝國大學の國語國文科卒業論文の数は八十一通と傳へられるが、其の中で小學の物として動かぬは、

類聚名義抄の和訓について 吉村唯吉

の一篇に止まるのである。帝國大學以外にも大學は多いもの今姑く之を以て學界の趨勢を卜するには足りよう。若い學徒がこれに縛はぬは其の向の先達が無結果たることも往々あるが東北帝大にして猶前の傾向から除外せられぬのを見ると、先達の如何によるので無くて若い學徒の心を引付ける氣運が動かぬものと見ねばならぬ。

是の故に東大から出た「古本節用集の研究」は出版後既に十又八の星霜を経て居るが、殆ど前に往者なく後に來者なき觀を呈して居るほどである。然るに節用集と相關的に考へられる玉篇、其の「玉篇の研究」と題した一書が昨年末に學界に躍り出た吾人等がか空谷の聲音として之を迎へずに居られよう。

「玉篇の研究」は必ずや「古本節用集の研究」に哲證せられたものであらう。けれども其の内容を見ると意に撰を異にして居るのは節用集が全く吾が國に成りて吾が國にて用られたに比して、玉篇が漢土に成りて吾が國にて用られたことにも原因す

書

る。しかも玉篇の原本が既に漢土に佚して吾が國のみ其の一部を存する事實は特に吾が國にて「玉篇の研究」の出るべきことを要求するかに見えるに、今日まで誰も手を著けなかつたとは實に我が學界としても粗忽な事であつた。玉篇の原本は既に黎庶昌によりて又羅振玉によりて附印せられたといふ、自分の寢齋の中に他人の軒牕を聞く如き事實さへあつた後に於てをやである。學問に鎖國も何も無い筈だが、さは云へ私は「玉篇の研究」の著者に感謝するに吝かなる者で無い。

玉篇が漢土に成つたといふ事は單に國語にのみ通じた學者には披ひ悪いことである。玉篇が吾が國に用ゐられたといふ事は單に漢文にのみ通じた學者には持て餘さねばならぬ事である。是の故に玉篇の研究は國語漢文の雙方に通じた人で無くてもならぬのである。これも節用集の研究に啓發せられて逸早く之に指を染める人を得なかつた一因だらう。

「節用集の研究」は極めて尊い書である。特に節用集の前後に出た國語辭書について詳しく記述をなされた事は、曩に東大國語室が烏有に歸して各本の世に存せざるべき今日に於ては實に有り難い事と悦ばねばならぬ。然かも該研究は大體に於て節用集各本の系統を明らかに力を注がれたもので、節用集に收められた語句(即ち内容)には立入つて居られぬ。此は節用集が當時の庶民向の辭書であつた性質からしてさる内容までは含んで居らぬ實情からしても當然の事であるが、玉篇は之とは異なりて當時に於ける智識の最高峰として存在したのだから、其の

評

或は解釋が或は引用文が當時の若しくは後世の學問に至大の影響を興へて居るのである。此の點に於て「玉篇の研究」が「節用集の研究」よりも骨が折れる仕事だつたと見るのは適當であるまい。換言すれば玉篇の研究に於ては其の解釋や引用文につきて其の優つた點を見逃さぬだけの該博な智識と精深な研究とを既に有する人で無くては其の任に當り得ぬからである。しかものみならず玉篇の研究には今一面倒な事がある。宋本にはいはゆる僧神珙の九弄反紐圖が、元本には玉篇廣韻指南が附録せられて居ることだ。此等は玉篇本文の解釋や引用文とは全く別なもので、即ち支那音韻學の一部をなすべきものであるから、之を披ふには又支那音韻學に若干の造詣を有する人たらざるを得ぬのである。然るに支那音韻學にも種々の方面があるが、此等はいはゆる韻鏡八年と云はれて人を迷宮に引入れるやうな事項なのだから片手間では明けようとしても追付かぬ代物なのであることをも見逃がされぬ。

此く數へ立てて見ると玉篇の研究の容易に世に出なかつたも亦宜なりと云はねばならぬ。然るに今敢然として之に當つた人がある。盲人蛇に怯ぢずの徒なりや否や。

「玉篇の研究」は四六倍版の大冊で、圖版二十面、本文六百八頁、索引二種二十二頁の外に目次、凡例、書後より成るもの、東洋文庫論叢として其の第十九に收められたるもの、本文は前後篇に分たれて前は「玉篇考」、後は「玉篇佚文」、「玉篇考」は又正篇——原本玉篇や其の著者顧野王について、續篇——宋本

40-8

玉篇、元本、明本、清刊本、本朝刊本、和玉編について——「玉篇佚文」は又内篇——原本玉篇の佚文一千七百九十一字、外篇——然か定め難き佚文三百四十九字——に分たれたるものである。此の二千四百十字の佚文は我が國籍二十六種、漢籍十二種から拵せられたもので、此の三十八種の中には八十卷華嚴音義私記、成實論天長點、仲算の法華釋義文、醫心方、寫本文選集注殘卷の如き希觀の書さへ存するを見れば、いかに著者が畢生の努力を盡したかが首肯される。

更によりて其の内容を見るに原本玉篇の著者顧野王が希馮を字とせるとによりて希馮野王恐らくは漢の馮野王を理想とした志士だつたらうと想像したり、梁の顧野王と云ひ習ふが梁の顧野王か陳の顧野王かと詮議したり、顧の原著は直に修正を加へたりとする史筆の邊に信じ難きを證したり、さて漢字孳乳の歴史を繰ねて玉篇が當時の字書界に占めた地位を論じたり、其の訓詁によりて始めて吾が國古典の用字の明らかめらるるを明したり、實に周到な用意の下に微に入り細を穿つた研究を進めてある。しかも漢土の唐代に於ては、玉篇が南朝に成つた爲に正當に評價せられざりしに同情して、

あゝ出自によりて其の眞價を認識せられずして枉屈に泣くもの豈ひとり玉篇のみならんや顧氏のみならんや。
と三嘆せしは夫子の意那邊にあつたらう。今や著者の眞價は認識せられて此の一冊は永久に學界に輝く。枉屈に泣いた涙は疾うの昔に歡喜の其と化したらう。

原本玉篇が七卷吾が國に現存する事を明らかにした處で、魏川時代の寫本と古逸叢書の底本としたものとの間に相違あること、魚部は僅に十三行だが而かも其の間に錯簡があることを發見したなどは以て著者の篤學慎思を證するもので、書物にかけでは如の如き眼識を備へてゐた揚守敏や羅振玉さへも俱に看過した事なのである。

又玉篇に引用した説文四百四十二條をば悉く今本説文と比較した如きも僅に一部の專書とすべきで（現に一切經音義引説文箋といふが存する）段玉裁・桂馥・王筠や説文古本考の考などを參酌して其の優劣を判した所論は近來世に認められ出した説文研究への一大提供で無からうか。

宋本玉篇に存する九弄反紐圖には魏川時代にも韻鏡易解の著者の盛典や麟光韻鏡の著者の文雄などがそれぞれ解釋を下して居る。此の著者は之に對しても更に進んだ明快な新解を下したのみならず、我が國に存する唐院本九弄十紐圖を取り上げて兩者の孰れが優れるを論定したる如き恐らくは九弄圖成りて以來始めて其の正解が現はれたといふも詭言であるまい。元本に附せる玉篇廣韻指南につきても韻學集成によりて切字要法を照し奇字指迷以下數節の各字に其の本づく所を述べけたる如き著者の淵學並に漢字に對する淹博の蘊蓄を發揮して、其の得意滿面で筆を進められた状を想像すると寔に愉快に堪へない。

著者の目撃したものは宋元明清本で十五種、本朝刊本で十二種、和玉篇で四十四種、すべて七十種に餘るに更に内外の書目後の國阿蘇の宮の神主友成とは我事なり、我未だ都を見ず候程に此度思ひ立ち都に上り候」と謠曲高妙に見えた阿蘇山、其の火の神の鎮りま才熊本に在る岡井慎吾氏である。氏は朝夕は「都を見ず候程に」といふべく、帝都よりはは遠く越在して居るがしかも學を好むことは阿蘇の噴火ほどに熱烈なので此の大著を成して學位を享け、今は國立公園となつた位に涼しい顔をして居る一學究であり、決して盲人蛇に怯むずの類にあらざること

濱野

彌富氏の「日本精神十講」

日本精神を説ける書物世に尠しとせぬが難解か矯激に過ぐるか或は茫漠として捉へ難きものゝみである。本書は、文部省成人教育講座・公民教育講座・青年團・處女會・教育會・神職會其他各處に於ける講演を整理し分類したものだけあつて、努めて現實に即し古典史實に準據し、其の態度の中正を得たる、觀察の妥當性を帯びたる、本書の特色として誇り得よう。而も其間に著者の鬱勃たる胸中の義憤は隨所に横溢し、世を憂へ今を慨する邊、讀者をして感情興起せしめる所甚大なるものがある。含蓄に富んだ、讀みよい、一風趣の異つた日本精神講述書と

は評者の讀後感である、讀者殊に教育家諸氏に精讀を薦める。
—— 進藤 —— (四六判一七八頁價一圓本郷區辰砂町一五素人社)

によりて其の知らるる限りを述べて居らるゝが、本稿の冒頭に述べた如く新しい材料が日に月に發見せられる今日著者が東西に越在しては其の見落しあるも亦已むを得ぬ。本書に於て中田博士の言を過信して中田本を烏有に歸したと記して居るが、其の副本は國語研究室に存すること、弘治鈔本の玉篇が安田文庫に存すること、大概本の完全なが亦安田文庫に存せるを知られぬこと、(此の二項は川瀬學士が本年二月の書誌學に發表)慶長十五年無刊所本に兩種ありとは本書の特筆だが、岡田學士は有刊所本にも初次の兩刻あるを明らかにせられたこと、(此の一項は立命館文學の本年二月號に詳し)の如きこぼれ種あること其である。是れは本書の微形と云はれぬことも無いが、其の成書の際に明らかになつて居た事實を旨落したので無いから以て著者を責むるは酷に失しよう。私は寧ろ東方文化學院が原本玉篇を影印せられ出して其の進行中に本書が世におくられ、川瀬・岡田の諸學士が玉篇の各本について論議せられたを首として自今本書が漸次讀書子の欣玩する所となると俱に倍々玉篇に對する關心の濃厚になりゆく時、本對が其の氣運を導いた中心となつた事を賞すべきだと信するのである。而して其が又若い學徒の心を小風即ち字書の方に引付ける誘因となりて、從來後れ勝に見えた一角にも新興の研究が然出して國語漢文の全面的發展ならんは眞に望ましい事で無からうか。

此の「玉篇の研究」の著者は何人ぞ。今は世界的火山として國立公園指定地として有名だが、古典的には「抑是れは九州肥